



「衣裳着人形とは一味違う趣があります」と、本田さん

輝いています

ひと

木目込み人形教室 講師

ほんだ まさこ
本田 正子 さん

伝統文化を通してつながりを

全

体的に丸みを帯び、味わい深い表情が特徴の木目込み人形。「木目込む」とは、人形に筋彫りを入れ、そこに布の端を埋め込むことをいい、これにより人形が衣装を着ているように仕立てられます。この伝統文化の魅力を伝えるとともに地域の交流の輪も広げているのが本田正子さん(57歳・中央3丁目)です。

小さい頃からおひな様が大好きだった本田さん。二女だったため、自分だけの人形が欲しいとの思いが創作活動の原点でした。木目込み人形との出会いは約30年前。仙台に住んでいたときに、体験教室に参加したところ、その素朴で温かみのある風合いに魅せられ瞬く間にとりこまれました。作るのも、飾るのも、贈るのも楽しい木目込み人形を広めようと、約10年かけて講師の資格を取得。各地の公民館等で教室を開き、2年前に転居してきた蔵でも地域に根ざした活動を始めました。

体験教室では、節句にちなんだ人形や翌年の干支など手のひらサイズの作品を作ります。受講生は小学生から年配のかたまでさまざま。手先の器用な子どもたちが隣のおばあちゃんに教えてあげるなど世代を超えた交流も生まれ、「次の干支もみんなで作りたい」と、好評を博しています。

そんな本田さんの作品は、長年愛用されてきた衣服を生地として木目込むなど工夫を凝らしたものばかり。最近では、蔵で出会った双子織を積極的に取り入れています。「普段使いに適した双子織は木目込み人形との相性が抜群です」と、にっこり。これが縁で、宿場まつりなどの作品展にも関わるようになりました。活躍の場とともに交友関係も広がります。「私が誰より楽しんでいきます」と語る、本田さん。これからは次世代と伝統文化をつなぐ懸け橋となり、地域に笑顔の木目込んでいきます。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

— No.12 —



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

現在の茨城県古河市で生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。

暁斎は明治18年頃、英国人の弟子ジョサイア・コンドルの目の前で「鯉魚遊泳図」を描きました。本図はコンドルが、その暁斎作品の中の2匹の鯉を模写した掛軸です。コンドルは明治10年に来日。現在の東京大学の教授となり辰野金吾や片山東熊らを育て、自らも鹿鳴館や旧岩崎邸を設計しました。そして明治14年頃に日本画を習うため暁斎に入門し、明治17年には第二回内国絵画共進会で褒状を受賞するまで上達しました。暁斎作品を手本にしたこの「鯉之図」も墨の濃淡と金泥で見事に描いています。

河鍋暁斎記念美術館 5月1日(月)～6月25日(日)
国際博物館の日記念「暁斎 その交流さまざま」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 木曜日
毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般320円

中学生～大学生210円
小学生以下105円
(20人以上の団体は要予約)
詳細 = 同館 ☎441・9780



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



ジョサイア・コンドル(暁英)筆
「鯉之図」
絹本墨画金彩

本作品は展覧会で御覧いただけます